

を實際に遂行する人間を見付けることが出来なかつた。謂は、彼等は地上の天國の設計だけはしたが、その設計に基いて、實際に天國を建てる技師や大工を以出すことが出来なかつたのである。

ところがマルクスミエンゲルスとは、資本主義の下に於ては、生産力發達の結果、社會が益々混亂し、民衆は愈々奴隸的地位に陥るまいふことだけを示すに止まらず、進んで、産業が集中せられ、強大な労働階級が出現し、その労働階級が感情的にも智識的にも、新社會の實現を要求して已まず、且つそれを實現しようとする職のやうな意思をもつことに依り、始めて社會主義の基礎が築かれることを示したのである。マルクスミエンゲルスは、萬國の無産者に向つて、彼等の勝利——即ち社會主義の勝利が、歴史の必然であることを説いた。けれども同時に彼等は、此勝利は、無産者がボンヤリと懐ろ手をして居つても、歴史的發達の或時期に達すれば、獨りで、潮から牡丹餅式に得られるものではなく、日々社會生活のあらゆる方面に亘つてブルジョア階級と惡戦苦闘し、血の汗を流して準備を怠らぬようにしなければ、最後の決戦に勝利を得ることは覺えないこと、且つこの最後の革命的決戦は無産階級の獨裁で局を結ぶこと、且つ無産階級の獨裁の外に、労働者を社會主義の社會へ導く道は絶対に無いことを説いたのである。

無産階級の勝利に必要な條件についてのマルクス、エンゲルスの學説は、千古不磨の眞理である。彼等が人類の未來を透見して、共產黨宣言の中にそれを明言して以來、今日に至るまで約七十年の間に、資本主義の構造の部分々々には多少の變遷があり、所謂社會主義者の中には、それを誤解した者もないではなかつた。けれども資本主義發達の大體の原則には何の變化もなく、そして今日、世界が始まつて以來の、最初の社會主義革命に際して、吾々は始めて眞に、徹底的に共產主義の理論を理解することが出来る。吾々は最初の社會主義革命に出會ひ、その退きならぬ必要に迫られて、始めてマルクスミエンゲルスがどれほど透徹した、偉大な智力の持主であつたかを知ることができた。共產主義は革命の教理であり、隨つて革命時代に於て、始めてその意義を十分に理解することが出来る。されば資本主義勃興當時の混沌たる動亂の時代に、革命の子マルクス、エンゲルスの胸裡には、また共產主義の理論が、今日の革命時代に至るまでの、久しい平和的發達の時代には、十分理解されずに居たのも、一應尤もにも思はれる。

分るの運動から、此不純な分子を剔去してしまつた。世界の労働階級は、眞にその使命に忠實にしようとする以上、自ら第一に、種々なる似而非共產主義の發達の跡を歴史的に解剖し、どういふ状況の下に、斯かる思想が起つたかを知らなければならぬ。

【二】 え、共產主義の跋扈

一八五〇年代に大體の骨組が出来たマルクス説は、一八八〇年代に至るまで、廣く世間に流布しなかつた。一八六〇年代から七〇年代にかけて、フェルディナンド・ラサールの指導の下に、獨逸労働者が奮起した時、労働者はマルクスの著作の一篇にすら接して居なかつた。労働者はラサールの小さな、熱烈なパンフレットを通じて、全然間違つて居ないまでも、多少妙な處のある共產主義の思想に浴して居たばかりであつた。ラサールは、資本主義が非常な勢で發達して、全歐羅巴に於ける反動的勢力を強め、あらゆる問題が軍閥及び資本家の力一つで決定されるような時代に出現して、労働階級の奮起を促さうとしたのである。

當時獨逸では、貴族階級が大ブルジョア階級と提携して、統一的な資本主義國家を造らうといふ大事業に熱中して居た。一八四八年に、革命的手段に依り統一獨逸共和國を造らうといふ試みがあつたが、結局それは失敗に終つた。所がそれと同じ事業、即ち獨逸ブルジョア階級の機關としての獨逸帝國の建設といふ事業は、ブルジョア階級と貴族階級との提携に依り行はれた。彼等は獨逸諸邦の官僚財閥の聯盟といふ反動的な組織によつて、帝國を建設した。この獨逸帝國の運命はこの一團に依り支配されることとなつたのである。ラサールが獨逸労働階級の奮起を促したのは、かような時節であつた。當時の労働階級は、獨逸民衆を指導するだけの力は持てゐなかつたが、猶ほ支配階級に對して、